

認知症カフェの意義と 継続した活動に向けての課題

—S市の実態調査からの考察—

中家 洋子

わが国は、高齢化の進展に伴う認知症の増加に伴い、認知症施策推進 5 か年計画(オレンジプラン)、認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)を打ち出し、「認知症があっても住み慣れた地域で暮らし続けることのできる社会の実現」を目指している。

新オレンジプランにおける認知症カフェは、早期に認知症の人を発見し医療やサービスに繋がる場、情報交換の場、家族や認知症の人の相互交流の場、家族支援の場、地域の人々の認知症に対する理解が深まる場など、認知症になってもできるだけ地域で暮らすことができ、地域で生活をサポートする地域づくりの一つとして、各地で普及している。認知症初期の段階では、診断後にすぐ介護が必要なわけではなく、認知症と診断を受けても、身の回りのことはできることが多い。彼ら、初期の認知症の人を地域で支える場の一つとして認知症カフェは期待されている。

特に、新オレンジプランで打ち出されている、認知症の人や家族の視点からの理念は、認知症ケアの歴史からみても画期的な国家戦略といえる。その中で、認知症カフェは、地域での暮らしを支える集いの場として位置付けられ、各地で取り組まれている。だが、公的な基準や制約もない中で、その活動は端を発したばかりであり、いくつかの効果が報告されているが、まだ手探りの状態である。そこで、認知症があっても住み慣れた地域で、その人らしく過ごすための場として、認知症カフェの意義や課題を明らかにする必要があると考えた。

これらの背景より、本稿ではまず、各地で取り組まれている認知症カフェの実態を先行文献により明らかにした。そして、筆者のフィールドであるS市を対象として、フォーカス・グループインタビューとアンケート調査を実施し、その意義と課題を探った。

本稿の各章ごとの要約は以下の通りである。

第1章では、わが国の認知症の人を取り巻く状況をケアの変遷から概観した。認知症ケアの歴史は、人権も保障されない座敷牢への監禁の時代から、精神病院を中心としたケア無き時代、集団施設での画一的なケアから、住み慣れた地域での家族を含めた本人を主体としたケアの変遷を経る。また、制度政策への影響として、「認知症の人と家族の会」の提言があり、認知症を取り巻く状況は大きく変化している。

第2章では、各国の認知症施策を探るとともに、先行文献でカフェの位置づけ、実態を把握した。各国の認知症施策は、認知症の人や家族支援が早くから国家戦略として進められていること、その背景には、認知症の人の増加に伴う医療費の削減があることが明らかとなった。また、わが国の認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)は、認知症の人や家族の視点を骨子とした施策であり、その中で、認知症カフェは、認知症の人やその介護者への支援を目的として、地域の人や専門家と情報共有し、相互理解を図るための集いの場として位置づけられている。また先行文献や各地の取り組みより、今後認知症カフェが広がるためには、地域の特性に合った活動が望まれること、公的な後方支援が求められること、可視化できる活動であることが示唆された。

第3章では、本研究の主題である筆者のフィールドであるS市の認知症カフェの取り組みを対象に、フォーカス・グループインタビュー調査と認知症カフェを開催している団体へのアンケート調査を実施し、実態を明らかにした。

第4章では、認知症カフェの調査結果を考察し、意義と今後の課題や限界について述べた。

結果、認知症カフェの意義については、以下4点の知見が得られた。1点目は、地域の認知症の人たちの暮らしの現状を把握し、仕事に還元できる。2点目は、今後の介護保険法の改正を見据えた地域づくりの中で、社会資源の一つとなる。3点目は、本人、介護者の支援の場となる。4点目は、地域住民への認知症理解の場となることが示された。これらの結果は、先行研究を後押ししたものであり、認知症カフェが地域で認知症の人や家族を支える資源の一つとなり得ることを示唆した。今後の新たなカフェの増設に向けて、根拠となり得るものである。

一方、課題として、以下の5点が明らかとなった。1点目は、対象者の重度化と認知症カフェの位置づけである。2点目は、交通手段による限界である。3点目は、疾患の理解とコーディネーターの役割である。4点目は、参加者の促進である。5点目は、運営費の問題である。

以上、S市では多くの課題を抱えながらも、福祉に携わる人たちが中心となり地域に広がりを見せている。だが、認知症カフェの意義は示されつつ、制約もなく保証もない自由なカフェの運営が、その質を担保しながらどのように発展していくか、認知症を自らの問題として捉え「認知症になっても住み慣れたでその人らしく過ごす」地域づくりの実現に向けて、地域住民や行政を巻き込み取り組まなければならない。

本稿の限界として、あくまでも筆者がフィールドとしている認知症カフェの実態やS市の現状から考察したものであり、他の地域に必ず当てはまるものではないと考える。だが、超高齢化社会の中で、国が進めようとしている認知症カフェが広まるための課題を明らかにしていくことは、その課題解決の一助になったと考える。